別紙１

地域との連携・協働による「じもと学」の取組について

北海道登別青嶺高等学校　学級数９　（校長　坪井　克彦）

□　実践の概要

本校は、令和３年度及び令和４年度に「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究」（文部科学省）の指定を受け、公民科を中心に地域と連携した主権者教育の実践を行った。本稿では、引き続き実践している学校設定科目「じもと学Ⅰ」及び「じもと学Ⅱ」の取組について紹介する。

１　実践の目的

令和３年度からの文部科学省の指定を受け、現代の諸課題を追究したり解決したりする活動を通じて、主権者として必要な資質・能力を育むための教科等横断的な学習プログラム（育成を目指す資質・能力をベースに整理した主権者教育の全体計画）及び新学習指導要領における科目「公共」の単元の指導と評価の計画の開発を行った。この研究成果を踏まえ、社会に開かれた教育課程の実現のために、令和５年度は学校設定科目「じもと学Ⅰ」及び「じもと学Ⅱ」を中核とし、地域と連携・協働しながら、生徒が現代の諸課題を追究及び解決したりする活動を通じて、主権者として必要な資質・能力を育むことを目的とした取組を教育課程に位置付け実施した。

【町づくりを意見交換】

２　実践内容

⑴　実施計画

学校設定科目「じもと学Ⅰ」及び「じもと学Ⅱ」は、地域の課題解決を大きな目標に据え、登別市や事業所の協力を得ながら、双方にとって有益になる活動を行うとともに、本校の立地を活かした観光教育に係る実践を行う。

「じもと学Ⅰ」は異年次混合授業の実施、「じもと学Ⅱ」は前年度に「Ⅰ」を履修した生徒が履修するとともに、地域の課題解決に向けた具体的な方策及び活動を年間計画に位置付けている。また、活動資金を補うため、クラウドファンディングで寄付を募る活動も行った。

【湿原をイメージした商品】

⑵　取組の具体

ア　「じもと学Ⅰ」：地域への理解を深め、課題を見いだし、解決策を考察するために、市職員等による講演や地元企業への訪問等を行った。

イ　「じもと学Ⅱ」：「じもと学Ⅰ」にて見いだした課題を、高校生のアイデアで解決し、地元の活性化に寄与することを目指した。生徒は「環境」、「食」及び「観光」の３つのチームに分かれて、ゼミ形式で実施した。

(ｱ)　環境チーム：環境問題の啓発活動及びキウシト湿原の知名度を上げることを目標とし活動した。特に、地元企業とコラボレーションし、生徒のアイデアを商品化した「ティラミスしちゅげん」などを販売できたことにより、生徒は、環境問題への意識の向上及び自己肯定感の向上等を得ることができた。

【地元食材で商品開発】

(ｲ)　食チーム：登別の地元食材の魅力をより多くの人々に知ってもらう活動を行った。特に、地元の食材を活用し、地元企業の協力を得て「JAN JAN HELL 麺」を開発した。なお、生徒の意欲的な取組により、同商品は、学校祭で販売したほか、高校生チャレンジグルメコンテストに出品することができた。

(ｳ)　観光チーム：登別温泉を始めとする観光資材をアイデアで図案化し、これを専門家がデザイン化してトートバッグにあしらい製品化した（商品名：ジモトート）。製品は、地域のお祭り等で販売し、登別の魅力を発信した。また、北海道開発局に協力・依頼して、高校生による観光ガイドも実施した。

⑶　取組後の点検・評価、工夫改善

生徒の地元の価値の再発見と地元への愛着意識の醸成を実現することができた。一方で、学校外からの提案や依頼を実施することを優先したため、今後は、生徒が主体的に活動することができるように、実践の目的に立ち返り、内容を精選するとともに、年間計画の見直しを図る。

⑷　改善後の取組

次年度に向けて、今年度の実践の一部を「総合的な探究の時間」に導入するなどして、「じもと学」の生徒だけでなく、全生徒が地域に係る学びを経験できるよう検討している。

３　実践のポイント

・「じもと学」の実施に向けて、委員会を立ち上げ、系統的・継続的な形になるように組織的な対応を行った。

・ＩＣＴを活用し、アンケート（意識調査等）を行うことで、生徒は調査研究等に役立てることができるとともに、指導者側は生徒自身の意識の変容について把握することができた。